



早稲田大学総長 殿

2009年 4月 27日

所 属 文学学院
資 格 教授
氏 名 小 林 茂 印

特 別 研 究 期 間 研 究 成 果 報 告 書

1. 研究課題：大正期日本人のパリ体験とフランス文化の日本移入
2. 研究期間： 2008年 4月 1日 ～ 2009年 3月 31日
3. 研究場所（国/都市・機関名）：日本国内（東京/塩尻）；フランス（パリ）
4. 研究成果概要（2,000字以内）：

本研究には3種の項目が予定されていた。

1) 吉江喬松とその時代

これまで、吉江喬松の著作物を中心に検討を進め、また1920年夏までのフランス滞在についてもそのおおよそを概観してきたが、さらに今年長期研究期間を得て、さらに踏み込んだ研究を行なった。

①長野県塩尻市の吉江家に保存される、吉江の書簡およびノート類を、吉江家の同意を得て、2008年春に数度にわたって現地を訪問して、調査撮影した。

②これによって得られた文書写真を印画してこれを文字起こす作業を行なった。内容に立ち入っての解読は、現在進行中である。

なお、上記2項の研究作業は、特定課題研究としての補助を得て、これを行なうことができた。

③吉江がフランス滞在中の夏季期間在籍した、グルノーブル夏期大学に関して、その実際の跡付けを行う予定であったが、これは、その資料の所在を突き止めるにいたらず、なお継続して、調査方法を検討中である。したがって、グルノーブルにおける滞在住所の確定にはいたっておらず、実地調査は行なわれなかった。

④パリにおける滞在住所はすでに知られていたが、その実地確認などを行い、また同時代の日本人滞行者に同住所滞行者のあることを、各種資料から確認して、これが長期滞行者用の家族的下宿であったことが判明した。

2) 1920年代パリ滞在の日本人の研究

①第1次世界大戦終結後、多くの文学者、美術家がパリに暮すようになるが、その滞在の実際を、あらかじめ調査して準備した資料に基づいて、住所などの確認を行なった。当時の通りの名称から変更されたものが少なくないため、街路の歴史にかかわる資料によって変動を確認

※研究終了後2ヶ月以内に提出してください。ワープロ原稿の貼付けも可。なお、学術研究活動情報（学術年鑑 Web）のホームページに掲載しますので、電子メールでも研究支援課まで（tokkenseika@list.waseda.jp）ご提出くださるようご協力をお願いします。

の上で調査に当たった。吉江喬松以外には、藤田嗣治、島崎藤村、薩摩治郎八、小松耕輔、辰野隆、内藤濯など、主に大正期の滞在者を対象とした。昭和前期の滞在者の一部については、既に調査を済ませていたからである。

② 芦屋市立美術博物館などに收藏される、写真家中山岩太（1927年当時パリに滞在して日本人を対象に写真館を営んでいた）の資料などの調査に当たる予定であったが、1）の①②の作業に時間がかかり、芦屋への調査行は割愛せざるを得なかった。

3) 薩摩治郎八とアンドレ・オノラ

パリに滞在した日本人の中に、1929年、パリ国際大学都市日本館を建設して寄附した薩摩治郎八がいる。その生涯の検討の中で、

○パリ大学都市日本館建設事業検証のため、当時の大学都市総裁アンドレ・オノラとの交流について、大学都市本部に收藏の資料を調査した。

これについては、本報告者が元日本館館長であり本部関係者とは旧識であるため連絡を取ったところ、2010年がオノラ死後60年にあたることから、国際大学都市においてもオノラの事跡発掘の調査を始めていることが判明した。そしてそのための準備委員委員として迎えられ、調査に協力することがあった。

本研究の枠内で言うならば、1926年にはじまる大学都市本部と日本館（準備段階を含む）の連絡の記録及び関連の図像資料を調査して撮影などの方法で記録した。

3) その他の研究活動

以上の調査研究のほかに、長期研究期間を利用して行ないえた研究等に、以下の各項がある。

①既に1987年在外研究期間において着手した、18世紀ドイツ詩人の物語詩『レノーレ』のフランス移入にかかわる研究の範疇であるが、新たに確認すべきテキスト類の存在が新たに明らかになったので、国立図書館において文献実物の調査に当たった。

②2009年度よりゼミの発足する、文化構想学部において、比較文学プログラムを実施しているゆえに、適切な参考書を提供すべきことを考えて、クセジュ文庫のうちイヴ・シュヴレル著『比較文学入門』をパリ滞在中に訳出して白水社より上梓した。引用文献などの確認に関して、図書館などの利用の便があったからである。

③薩摩治郎八と日本館の建設に関して、9月21日に上記のパリ国際大学都市日本館において、講演（フランス語）を行なった。

④フランス教育功労勲章着用者の連合組織の内、パリ市15区のセクション会長と旧識であったため、講演の依頼をうけ、3月21日にソルボンヌ内の小講堂において講演（フランス語）を行った。本研究期間の主題のひとつである、吉江喬松のパリ滞在中に語り、また、第一次世界大戦下のパリ生活を綴った吉江の文章の一端を翻訳して朗読したが、好評を得た。

なお、この準備のために、インターネットの方法によっては送付を受けられない資料を用いるために、1月末に一時帰国をした。また、このほかにも、指導学生の博士論文審査のために、10月ほぼ一月を費やし、かつ、10月後半に一時帰国をすることがあった。

以上